

博士学位論文
論文の内容の要旨

氏 名 馬 場 康 徳

学 位 の 種 類 博士 (社会福祉学)

学 位 記 番 号 福博 (乙) 第 1 号

学位授与の日付 令和 3 年 3 月 20 日

学位論文題目 「高齢者住宅居住者のつながりと居住継続に関する研究」

論文審査委員 主査 清 水 海 隆 (立正大学 社会福祉学部 教授)
副査 溝 口 元 (立正大学 社会福祉学部 教授)
副査 蟻 塚 昌 克 (立正大学 社会福祉学部 教授)
副査 山 本 美 香 (東洋大学 ライフデザイン学部 教授)

論 文 の 要 旨

我が国は少子高齢化の進展とともに、高齢者の単独世帯あるいは夫婦のみ高齢者世帯が増加してきた。そして、高齢者のみの世帯では、住居の維持管理が困難、賃貸契約の拒否、さらには孤独死が社会問題となっていた。このような状況下で、高齢者の居住の安定を確保するための政策として、1987年に公営住宅の枠組みの中でシルバーハウジングの供給がはじまり、2011年に民間資本を活用したサービス付き高齢者向け住宅制度が発足した。今後、さらに世帯規模の縮小、高齢者のみの世帯の増加が見込まれることから、家族機能に依存しない高齢者のための住宅の確保は必要不可欠といえる。高齢期の住み替えは、不安やリスクが伴うことから、実際に高齢者住宅に住み替えた居住者にとって、住宅に“住み続けられるかどうか”は重要な問題である。

そこで、本研究では、高齢者住宅の居住継続意向に寄与する項目を明らかにすることを目的に、高齢者住宅への住み替えを選択した居住者像を探った。それ故、望まれる高齢者住宅を明らかにするため、特色のある 5 箇所の高齢者住宅の居住者について実態調査を行い、調査結果を中心に“居住者の人とのつながり”および“居住継続意向”について分析した。

高齢者住宅の研究には、政策、建物や設備、付帯サービス等様々な観点からの研究があるが、それらの多くは、住宅の供給や運営に関わる研究である。高齢者住宅に居住する側、即ち、居住者の視点からの研究は少ない。今後、高齢期の住まいを支える重要な選択肢の一つとして求められる高齢者住宅について考えるためにも、居住者の視点に立つ高齢者住宅の研究は重要であり意義のあるものといえる。

本論文は、序章と終章を含め下記の 6 章から構成されている。以下、各章の要約を行う。

- 序 章 研究の目的と視座
- 第 I 章 人口構成の変化と家族の変容
- 第 II 章 高齢者住宅の展開過程
- 第 III 章 高齢者住宅における事例調査
- 第 IV 章 居住継続意向と人とのつながり
- 終 章 研究の成果と展望

序章では、研究の背景の説明と先行研究を整理し、高齢者の置かれた現状認識から、高齢者住宅の必要性和本研究の目的について述べる。先行研究においては、居住者像や事業者像の調査分析はあるが、それらは、施設の規模や設備、居住者の自立度を含め、いずれも運営主体等への調査分析が多く、居住者自身の実態調査を行ったものは少ないことが明らかとなっている。

第 I 章では、我が国における高齢者の居住問題を考えるにあたり、第二次世界大戦後の人口構成等量的な変化、家族のあり方の質的な変容について概観することで、高齢者住宅が必要とされるに至った経緯を示した。

第 II 章では、施設および住宅としての高齢者のための住まいについて整理し、福祉政策と住宅政策の融合として開設されたシルバーハウジング、その後のサービス付き高齢者向け住宅までの高齢者の住まいの展開過程を概観する。さらに、

サービス付き高齢者向け住宅の現状をまとめた。

第Ⅲ章では、特色のある 5 箇所の高齢者住宅における居住者意識調査及び管理者への調査分析結果について述べる。

高齢者のニーズに応じた住宅の供給や整備を進める上では、高齢者住宅が高齢期の住まいとしてふさわしいものとなるよう不断に見直し、適切なものとしていく必要がある。しかしながら、高齢者住宅居住者に対し、直接調査を行った研究は少ない。また、既往調査の文献的分析のみでは、高齢者住宅へのニーズについて把握困難と考えられたことから、居住者意識調査を試みることにした。

ここでは、居住継続意向、生活の満足感、幸福感に関わる項目の抽出結果を示し、住宅内および地域での付き合いが居住継続意向、生活の満足感、幸福感にどのようにかわるかを検討した。その結果、「自己決定に基づいた住み替え」や「安心」、とりわけ「適度な隣人とのつながり」が、居住者の居留意識や居住継続意向の強さにつながっているということが示唆された。さらに、居住者像については、「住み替え理由」「住宅内の付き合い」「地域での付き合い」について住宅ごとの傾向がみられた。これらの結果は、望まれる高齢者住宅に求められる機能や条件を検討するための重要な指標となったと言える。

第Ⅳ章では、第Ⅲ章の結果を踏まえて実施した“付き合い”と“居住継続”を中心とした調査分析結果を示している。調査対象住宅は、第Ⅲ章で示した調査対象住宅中の 1 箇所である。

住宅内および地域での付き合い項目として 12 の質問項目を設定し、項目間のクラスター分析を行い「友人関係」「仲間」「互助」の 3 指標を作り、この 3 指標と居住継続意向、生活の満足感、幸福感との関係を求め、以下の結果を得た。

1. 「仲間」「互助」の得点が高いほどグループの居住継続意向の平均点が高い。
2. 「友人」「互助」の得点が高いほどグループの生活満足感の平均点が高い。
3. 「互助」の得点が高いほどグループの幸福感の平均点が高い。

また、住み続けたい理由についての分析から、「安心」という高齢者住宅の基本的な要件を超える理由として、「豊かな自然環境」という自己実現欲求が居住継続に影響していることが明らかとなった。自然環境を求めるというこの欲求は、

居住者の共通の価値観になっており、それが住宅内コミュニティの形成に役だっていることが推察された。さらに、高齢者住宅について「安心」の他に「自由」という概念が大きな意味を持っていることが明らかとなった。

終章では、第Ⅲ章、第Ⅳ章の調査結果を整理し、居住者の視点から考えられる高齢者住宅の必要性および人とのつながりと居住継続意向の関係についてまとめるとともに、今後の課題と展望を述べる。

高齢者住宅居住者の人とのつながりについては、住宅内における付き合いが居住継続意向、生活の満足感、幸福感に良い影響を及ぼしていることを示唆している。居住継続意向には、「友人関係」のような親密な関係よりは、散歩や買い物をするような緩やかなつながりと互助的な機能が影響していた。

居住者の視点からみた高齢者住宅については、以下の点が明らかとなった。

1. 役割としてのスタッフの見守りの他に居住者同士の見守り効果がある。
2. 高齢者住宅の良さは、「安心」の他に施設とは異なり自分の意思で行動できるという「自由」がある。
3. 見守りという「安心」と緊急時の対応を保障するという「安心」の提供を基本として、従来型の高齢者施設では難しい多様な価値観を持つ居住希望者のニーズを満たす付加価値のある住宅の提供が「住み続けたい」と思う住宅の提供につながる。
4. 民間型の住宅の場合、「住み慣れた地域」よりは「住みやすい地域」「住みたいと思える地域」に立地する住宅という選択肢も考えられる。
5. 住宅のコンセプトに共感した人々が集うことにより、共通の価値観の存在が居住者同士のコミュニケーションを容易にし、人とのつながりやコミュニティの形成に役立つものと考えられる。
6. 高齢者住宅が「終の棲家」になりうるのか否かという不安やそれらの不安に対応するフローチャートを示すことが、高齢者住宅居住者の安心につながるものと考えられる。

以上をまとめると、望まれる高齢者住宅とは、「自由」が保障され、見守りという「安心」と緊急時の対応を保障するという「安心」を備えていることを基本とし、さらに、多様な価値観を持つ居住希望者のニーズを満たす付加価値のある住宅であるべきである。

我が国の福祉領域における高齢者住宅研究は、背景となる時の政権や社会情勢、高齢者住宅を規定する制度に影響を受けてきたと考えられる。その結果、一定の議論や見解が示されることはあっても、それらが詳細に検証され議論が深められる結果には至らなかったのである。それ故、本研究においては、高齢者住宅居住者への調査により、居住者の視点から考え得る高齢者住宅像を描くことを試みた。この結果は、これまでの社会通念ともいえる“住み慣れた地域”で“専門職による見守りのもと”ということとは異なった、多様な価値観を支える“住みやすく”“住みたい”いくつもの地域で、高齢者同士の“緩やかな関係による見守りや助け合いのもと”という高齢期の住まいの選択肢を提案した。これは、世界でも類を見ない高齢化が進む我が国における高齢期の住まいを考える上で、1つの重要な視座を与えたといえる。